

しわじんでんしの語りを交互に奏し、これに藤舎呂悦氏の鼓、藤舎推峰氏の横笛が加わって互いに相手の音に影響されながらも合わすうとせず、或は反撥することもあるという楽しい楽想が展開された。古谷氏は珍しい鈴や金属の鳴物で琵琶の語りに加わり笛と鼓は或は急に又緩に、琵琶の崩れの場面に古谷氏の静かな金属音の反撥、強い笛の吹奏とゆるやかな鼓の音...凡そ従来の琵琶演奏としては奇想天外で琵琶の音締めと語りの魅力を感じた古谷氏が二千余の洋楽畑の人に琵琶を聴かせ深い感銘を与えたのは予想外の収穫であった。

尚当日の収益(入場料千二百円)は肢体不自由者協会に寄附された。

第二回赤心流 十一月三十日(土)昼静秋の大会 岡市婦人会館。赤心流春の大会は詩吟舞会、秋は各地琵琶の名手を招いて琵琶を主とした大会とされているが今年も天候にも恵まれ夕六時半の閉会まで盛況裡に終始した。竜の口、松永初心、鉢の木、市川竜堂、詩吟教盛塚、会長赤心流鶴翁(以下来賓)重衡、齊藤桜堂、高松城、京都田中鴨水、雨月、横須賀石井桑水、大楠公、京都矢吹旭美津、寂光院、同植村寛水、湯陽江、東京八束一峰、勝家の妻、京都梅原旭濤、小督、東京柏木篤道、吉野落、京都平井春嶺、西郷隆盛、横浜中谷豊水、安達夕原、同鈴木流泉(以下相談役)義元本陣、小野鶴彦

旭の森、小川野水、彰義隊、岡尾鶴城、外に詩吟十題。日本正調会五周年 十二月八日(日)昼記念演奏会 吹田市大阪電設工業健保組合ホール。吉野山懐古、籠原旭上、大森彦七、平田旭城、茶白山、小川旭光、小栗栖、光旭仙、堅田落、宮下旭富、平野の最期、宮下旭王、乃木大将、空野旭陽、水天門、平井春嶺、屋島の誓、岡部錦蝶、大物の浦、戸田旭公、玉藻の前、籠原旭上、山科の別れ、野尻振水、誉れの水馬、伊藤旭暢、恩誓の彼方、高島咄水、二〇三高地、奥村旭美、大西郷、籠原妙絃、一休禅師、松岡旭岡、外に山村流舞踊一。

札幌市内山鶴崇氏が 内山氏は五十余年市民文化奨励賞受賞の永きに亘り琵琶吟詠を通じて情操の陶冶、道義の昂揚、世相の浄化等に尽されその功績は顕著で今回頭書の栄に浴された。謹んでお祝申上げる。

伊東旭山氏 十月十六日幽門狹窄のため三鷹市下連雀三ノ二四ノ一二の自宅にて逝去、七十七才。松田静水師門下の逸材で三位研修同志会々員。謹んで哀悼し御冥福を祈る。

持院西町三〇の自宅で肝硬変症のため逝去。享年六十九。十六才から琵琶に志し故安田旭

琵琶 機関紙 京 結

第二四七号 京 絃 社

年 頭 所 感

主 幹 植 村 寛 水



昭和五十年の新春を迎え御祝詞を申し述べて同好各位の御健康を寿ぎ、併せて本年の御活躍を祈り上げます。

琵琶音楽が終戦後僅かながら振興発展の道を辿りつつあるのは一応喜ばしい事には違いないが、大局から静観してこの儘ではいいのかと考える時、全面的にイエスと云い切るのに躊躇せざるを得ない。琵琶人は伝統芸能に携わるものとして一脈の誇りを持っていることは否めないが、これを、より以上に発展させるという意欲に欠けて居はしまいか。演奏会の開催結構、同志の集まり又結構であるが、もっと積極的に琵琶の良さを一般に認識せしめる事を考えなければならぬ。物価狂乱、インフレ、公害、と世の中が物騒然として

りかねない、というような点も念頭に置かねばなるまい。(非公開の同志間の集りの場所などでは問題外である事は勿論である。)

演奏会といえは出演者のマナーにも問題がある。お辞儀一つを例にとってみても、引幕のない舞台に入って先づ頭を下げる、演壇上に座って又お辞儀をし、演奏が終わって再び同じ動作を繰返すなど頭を下げる回数が多すぎる人を度々見かける。頭を下げるのは琵琶器を膝に置く前と、演奏が終わって琵琶器を下に置く時だけでよい、それも寄席芸人のように最敬礼をする必要はなく、ほどほどにしておかねば聴客に媚びへつらうようで却って見苦しい。威張る訳では決して無く、物には程度ということがあるのを忘れてはならぬ。

演奏の前とあとに置く琵琶器の位置もまちまちで、演者の前に置いたり、左横に頭部を前にしたり後ろに置いたり、是等も一定にしたいもの、壇上に座ってから絃の調子を合せるなどは以っての外で非常識も甚だしい、

邦氏に師事、豪快な演奏で定評があった。京都琵琶協会所属。謹んで哀悼し御冥福を祈る。

あがき 寒い、今年の冬も矢張り寒い、本号が手許に届く頃には寒さも一層激しくなっていることであろう。おかげさまでこの冬も健康に過ごして下さることを祈ります。おかげさまでこの冬も健康に過ごして下さることを祈ります。おかげさまでこの冬も健康に過ごして下さることを祈ります。

昭和五十年一月一日発行(非売品) 編集者 植村寛水 発行所 京 絃 社 千569 高槻市津之江北町一ノ二番 電話 〇七二六(八五)六〇一五二番

賀 正

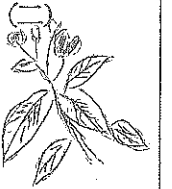
京 絃 社

腕時計やチカチカ光る指輪腕輪なども、はづして演壇に上って欲しい。又服装は男性は紋付袴、女性は袴又は帯を締めた姿、筑前琵琶人は演奏着を着ることになつてゐるが、やむを得ず洋服姿で演奏する場合は、薩摩筑前とも一定の簡単な演奏着を制定して、洋服の上に羽織るようにしてはどうか。飛躍的な着想かも知れないが、洋服が日常着となつてゐる現在に於ては、紋付袴をやめて総てこの方法を採用するのも一案ではあるまいか。

若い人が琵琶の魅力に引かれて弟子入り希望する場合、高価な琵琶器や撥の購入と紋付袴の準備に先づ難色を示す、安価な稽古琵琶や撥、洋服の上に羽織る簡単な演奏着、若い後継者の育成は何と云つても目下の急務である。同時に若い人々に向くような琵琶歌詞を演奏して幽玄な琵琶の音締めと品位ある歌詞の主旨を徹底させて欲しいものである。年頭勿々憎まれ口を叩いて誠に相済みません。あしからず御諒承の上本年もどうかよろしくお願ひ申し上げます。

断絃私語

生重定



よき時代の歌舞伎が昼夜二部興行制になつてから久しく、今日ではそれは当然のことの様に思われている。それは時間の刻みが段々せち辛くなつて来た時代の変遷に誰も疑問を抱かなくなつて来たことを意味する。今私達から失われつつあるものは自然だけではなく、時間も亦私達から小刻みに遠く離れ行きつつある。

二、三曲独演の後、最後に残して置いた得意の一曲を、さてこれからと撈を構えた所で「先生もお疲れになつたでしようが聞く方も疲れましたので……」と云うほろ笑ましい実話はよき時代の語り草となりました。

琵琶の演奏時間の短縮は今日では最早や必然、常識となりました。然し本来長い語り物であった歌詞の無理な切り貼りやつなぎ合せは当然尻切れ蜻蛉となり、舌足らずになり、たゞ切り捨てだけでは解決の出来ない問題を残していると思ひます。演奏時間の短縮が不可欠であるならばそれに相応した短歌が新しく生れなければならぬ、そして又作曲の面でも新しい構想が当然要求されて来る、従来琵琶がたゞ短縮されただけでは益々単調な

ものになり内容の低下に終るだけです。詩吟の素材である漢詩は短かく完結しており、又多様な伴奏をも擁しています。琵琶の素材と云えば平家物語などの古典でしようが、それ等は大河長巻の物語りでありこれを容易に圧縮することが可能でしようか、又適当に短縮されたとしてもそれを助けてくれる伴奏を持つていません。

邦楽の中で弾き語りを守っているものは寡聞にして琵琶より他に多くを知らない、弾き語りこそ琵琶の生命であると云う人達にとっては歌絃分離と云う音楽以前の問題は無縁なものでしようか、半世紀に亘る長い体験は弾き語りには最早や限界が来ていることを教えている、この断絃難い歌、絃を非情に引きさくことに依つてその二つは独立し墜ちて大人に成長する、そしてその大人同志がまた結合して一つになる。

私達は熱演と云う興奮によつて必要以上に琵琶を叩きつけてはいなかつたでしようか、打つ、叩くと云う事は最も原始的な快感を与えてくれるのですが、音楽の原点も亦そこにあるのでしようか、然しその過度の表現は演奏者自身のものであり、私達は反つてその空しさを感ぜさせられるだけです、原点とは単なる郷愁の地点ではなく、それはものゝ基点でありスタートの起点でなければならぬ。琵琶は淋しく深夜ひとり哭す、それは叩かれた創あとを嘆いているのではない、琵琶を何かの道具に酷使するだけで誰も自分を識る者

がないことを悲しんでいるのです、切々たるその声に誰も耳を借そうとする者はいない琵琶は遂にその張りつめた絃を自ら断とうとさえする。

私達は芸界の封建制を批判して来ましたが、その封建制の中に安易に依存し無為に時を過して来たのではないでしようか、創造性のない者にとつて封建制こそ安住のよき場所でしたが、その封建制も次第に崩壊しつつあり、新しい世界が展開されようとしています。舞台と云う戦場を退いた老兵の使命はそれで終つたのでしようか、過ぎ去つた華やかな舞台の名声は何時かは消え去る、さんざん踊らされて来た私達に、次の世代の若者に夢を託して自らの手でこれを踊らす時が今漸くやつて来た、私達の戦場は限られた舞台と云う空間だけではない。

二代吉水錦翁

小田原国尊先生を



徳ぶ(四)

東京 坂本 錦道

さて小田原先生は職業方面に於ては、前述のように大正十一年以来内務省造神宮使庁に勤務して十年も経過、年令も四十二才となられた頃、お役所の上司より身分が昇格(判任官)する内意が伝えられた。之については一

つの条件があつた、任官後に於ては芸人的行動は一切罷りならぬという達しである。先生の心には薩摩琵琶というものは、その創造期より日本武士道の真髓と両輪の如く、薩摩武士の修養の具として発達し、明治以後に於ても明治大帝の思召しを体し青少年の教育に欠くべからざるもので、ある時機には小中学校の必須科目とさえ叫ばれた事もあるこの琵琶を、一般邦楽の如く花柳傾斜より生れた諸芸と同一に見られる事は誠に遺憾千万、今日先生自身が立身の縮点に立つ時に之を捨てるといふ事は全く心外の極み、死ぬより辛い事であつたと思はれる。

茲に於て反骨の精神は、最早や官途を辞するより外ない窮地に迫込まれた。

その頃吉水錦翁二代目襲名もあり、多々益々先生の弾奏活動の旺盛な時で、こうした内部事情もあり遂にお役所勤めを退くことになつた、昭和六年六月四十二才の時である。

小田原先生の反骨精神によつて己れの信念を貫き通すという剛直さは、少年期にもありありと現れている。前に述べた陸軍幼年学校に入學して、凡備の少年であるならば満身に卒業も出来て、将来は将官級に進出も可能のエリートコースに在つた訳であるが、元來軍人間にある規律と云うものは、事の如何を問はず上官の命令に服すというのには解るが、教官や先輩の公私混同の命令には、小田原少年には一言もかかればならずで、私用に関する限りは頑として教官と雖も首をたてには振らな

いという反骨に徹していたらしい。この幼年学校(曾つて橋中佐が校長をしていた)中途退学の話が私と先生の間で話されていた時、奥さん曰く「中途退学なんて体裁の好い事を云うが、服従精神なしと見て退校を命ぜられたのですよ」と素破抜かれて、先生も苦り切つていられた事もあつたが、何しろこの少年は一筋縄ではどうにもならなかつたらしい。

茲で先生の歩んで来た過去の生涯を通じてみると、昭和六年六月内務省を退職し、再び同省に復職された十七年六月に至る十一年間は、職業の面から失業のブランクはあるが、この間は弾奏活動と門人育成、そして勝氣の奥さんは内職の店を開いたりして、内助の効と相俟つて案外気楽な生活が続いた。

時、昭和十二年七月日支事變の勃発、続いて翌十三年四月一日国家総動員法が公布されて戦域は止まる所なく拡大し、遂に昭和十六年十二月八日大東亜戦争に突入、この大消耗の作戦に国民生活は最低の、たゞ生きる位の線に低迷を余儀なくされる耐乏生活が始まつた。

この非常時局に応召者は続出し、人材の枯渴は朝野を挙げての現象で、先生の曾つて勤務された内務省の神社局もその例外ではなくこの官庁は特異な行政であるだけに、前歴のある先生の浪人的存在は注目的となり、加えて郷里出身の政府要路の顯官某氏の口添えもあり、再び呼び出されたのは十七年六月五十三才の事であつた。

その時の身分は比較的自由で拘束のない囑託採用であるから、舞台上に於ける弾奏、ラヂオ放送等も可能な地位で、先生は時こそ来たれと琵琶、詩吟をもつて国民の士氣振作や練成教育に努力された事は既に大方御承知の通りである。この時点に於て国の情勢は全く一変して、国民の士氣高揚を計るために小田原国尊を国家が必要と認めて来たのだから如何にも皮肉の感深く、憂国の志士小田原先生の得意や思うべしであつた。

さて戦果は日に日に我方に利なく敗退と玉砕を重ね、十九年十一月二十四日日本の首都東京は、敵B29八十機の大編隊によつて大爆撃が敢行され、続いて阪神を始め主要都市への爆撃は定期便のように執り行われ、中でも二十年三月九日夜百三十機による東京大空襲は死者九万七千人に及び、先生は愛器数面と明治大正以来の琵琶に関する重要な参考資料は悉く焼失され、焼野原に立つた先生の失望が思いやられる。そして其頃壕舎の中でわら半紙を綴つて和帖に記された和歌を二、三拾つてみる。

○ いのちも愛でし秘蔵の琵琶焼きて心淋しく辛作る我は

○ ひたむきに焼跡の土耕してつとめの余暇に辛作る我は

○ 晴耕は我にあれども雨読なし読む本さえも皆焼きければ (以下次号)

狂醉亭漫録 (第七)

古谷 寛 水



十数年以前に流行った「有楽町であいまし
よう」という歌謡曲に有楽町は現在東京
都心の繁華街だが、之は織田信長の弟の織田
有楽斎が、徳川氏に随従してから賜った邸宅
跡で今の世まで町名が残っている。

又京都の名物で明治初年から百年余も続い
ている都をどりの舞台のある歌舞練場は祇園
の有楽町に在り、之も織田有楽斎の邸宅跡で
現在の劇場風大会場の東側に接する大庭園は
有楽斎の設計に係り、東山の翠巒を借景にし
て林泉あり奇石銘木の配置よろしく京都屈指
の名園であり、興行場附属の庭園としては勿
体ない様を存在である。

さて織田有楽斎なる老人は飄々たる風格の
茶道を嗜む風流の士で、関ヶ原役には東軍に
付いたに拘わらず大坂冬の陣には西軍にあり
て、或時は淀君以下重臣達を愚口し、時には
家康以下關東方諸大名を罵る等の奇行多く、
孤高飄逸の人として畏敬され、一時は淀君の
下にて指揮権にも参与した枢要の人物である
が、反面關東方に内通の噂もあり、怪しまれ
乍らも東西交渉の際の立役者でもあった。
又後段に説く予定の淀君乱行の際にも却っ
て陰から扇動する等の奇怪なる所行もあり、

夏の陣の前には大坂城を脱出して東軍に味方
した事実もあり、大坂方から見れば確に疑問
の人物に相違ない。この機会に彼の生立なり
経歴を史書にて調べると、

織田有楽斎(一五五二—一六二一)
講は長益、字は源子(或は源五郎に作る)有
楽斎はその剃髪の名である。信長の弟で信秀
の第十一子である。(信長とは十八歳の年下)
天正十年信長の武田勝頼を討つや、信濃の木
曾義昌を援けて高島及び深志城を守り、信長
の弑せらるるに及び、豊臣秀吉に従い食邑を
摂津島下郡に賜う。関ヶ原の役には徳川氏に
属し、功を以て大和の地を食み、慶長十九年
大坂冬の陣には大坂城にあって諸將に推され
謀主となる。東西和なるや、城を出でて京都
に遊居し、煎茶を事とし、元和七年十二月京
都東山に卒す。年七十。初め茶道を千利休に
学び、一派を立てて有楽流と称す。法名正伝
院如庵。とある。

右の文中東山とあるは、例の三十六峰の東
山ではなく、東山と読み、有楽斎邸は当時京
都五山之一の建仁寺山内に位置した為、建仁
寺の山号、東山の事で、現に彼の墓所は邸跡に
隣接する建仁寺山内正伝院の境内に在り、従
って法名も亦正伝院となつてゐる。
大坂両陣に於ける西軍は、有力大名の脱落
から、主力は真田幸村を筆頭に、新規召抱え
の浪人連で占められ、事実は等の浪人中には
所謂天下の豪傑と称する知名の浪人も多く、
俗説の難波戦記は之等の豪傑連を加えて非常

に賑やかに且つ華やかに成つてゐる。
明治末期から大正初期にかけて大阪の寄席
浪曲の大家に初代藤川友春という人があつた。
此人は不治の業病の為半身不随であり乍ら、
珠を転ばす天成の美音と軽妙の節調と得意の
諧謔とケレンで客を喜ばせる芸風で、特に難
波戦記を得意とし、豪傑連の銘々伝等を詳細
に挿入するため全部を演了するには四十分高
座で満一ケ年余も要する程の長篇で、真田幸
村入城の場面の如きは無味乾燥であるべきを
実に面白く聞かせたもので、真田幸村の六文
銭の旗印の如きは如何にも颯爽として強い印
象を受けたものである。之を現在に例えれば
一年に亘る大河ドラマを一場面毎に興味を持
たせ乍ら一ケ年間独演する事になり、昔は偉
い芸人が居たものと今更感慨無量である。

茲で大坂入城の豪傑連、即ち岩見重太郎、
後藤又兵衛、塙団右衛門、猿飛佐助、霧隠才
藏、三好晴海入道等の列伝を記したいが残念
乍ら霧隠と三好は史書には全く見当らず、僅
に猿飛のみがその名を出してゐる。
○猿飛佐助、忍術者。戦国時代の忍術者とし
て伝えられてゐるが、甲賀流の書にその名が
記されたるは伝記を詳かにしない。
大正の初期に大阪赤本の傾向が講談豆本を
発行して世にもはやされた時、大阪成象堂
の武士道文庫(之は恐らく誤りて当時流行の
立川文明堂発行の立川文庫であつた様に記憶
する。ト寛水)の猿飛佐助の伝記行わるるに至
りその名著わる。とある。さて列伝に入る。

○薄田兼相(一六一五)

薄田兼相(一六一五)は、隼人正という。慶
長十九年冬、豊臣秀頼の兵を大坂城に挙げる
や、これに應じて徳川氏の兵と戦つた。時に
兼相は伯樂測の出丸にあつて中国、西國の敵
船を押える番船の下知をしていたが徳川氏の
將蜂須賀至鎮と戦つて敗れたので、翌元和元
年夏の役には死を覚悟して戦ひ、五月七日片
山道明寺附近の戦に於て真田幸村、後藤基次
等と共に水野勝成、本多忠政、伊達正宗と戦
ひ、遂に敗れて死んだ。一説に兼相この時通
れて鹿兒島に赴き、城下の或る酒造家に下僕
として任込んだが、大坂の事終つて關東の詮
議頗る嚴重を極めたので、何処ともなく立去
つたといふ。しかしこれはもとより信ずるに
足らぬことで、豊臣秀頼の薩摩落などと其の
揆を一にするものであろう。世或は神史に名
高い岩見重太郎が即ち隼人正であるとの説も
あるが、これとても固より信ずるに足らぬ。
蓋し「武者物語抄」「落穂集」「異本大坂記」
「創業録」等によると、兼相は大兵にして力
強く、大刀を抜いて力戦したようであるから
かかるところより「重太郎一代記」が結構せ
られたものであろうか。とある。

私は中学生時代から岩見重太郎とは薄田隼
人の前名であると確信してゐるので、どうも
右の記事に納得出来ず更に他本を調べると、
○岩見重太郎。豊臣時代の剣道家。名は兼相
もと小早川の臣、後年薄田隼人といつた。劍
道にすぐれ、諸國を遊歴中、天の橋立に於て

仇討の助太刀をし大川八左衛門等を討つた話
は有名である。のち秀頼に仕へ元和元年の役
に大坂方として奮戦し、五月五日伊達氏の將
片倉重綱の勢と戦つて道明寺で討死した。
とある。私は幼少の頃夜店ののぞきからく
りて、岩見重太郎の御々退治に感激し、中学
生の頃には貸本屋の講談本を読み耽り、天の
橋立大仇討で岩見重太郎が仇の悪漢をバツタ
バツタと斬り殺す光景を想像して快哉を叫ん
だのであるが、思えば未熟で世間知らずの少
年のはかない夢であつたのである。(続く)

我が道を行く

六十五年(二二)

西郷 天風



亦かつてステッキガールの経験をもつ彼女
はその体験談も面白く、案外朗かな話の裡に
この辺り一帯のたまたまいが琵琶教授の看板
を置くのに不向であることを悟らせてくれた。
そうこうする内、かの芳野鶯嬢主催の筑薩
合同琵琶大会が渋谷劇場に催うされ、例によ
つて例の如くその夜は彼の家に一泊となり、
教授所の話題などで床についたのは二時を過
ぎる頃だった。

やがて、フト物音に目ざめ聞耳をたてれば、
それは火事の布れ太鼓で「火事は赤坂」「火
事は花家」と叫ぶ、その声に飛び起きた私は

胸さわぎも只ならず、道玄坂を飛ぶように降
りて一目散に坂道を青山学院前に上り、火事
見物の人垣を縫いながら青山通りを赤坂へと
走り続けること約一時間、漸く現場に着いた
頃警備の縄張は既にめぐらされ、おめかけ横
丁全域へは踏入ることを許さず、事情を告げ
ても耳をかすことすら拒む有様だった。

山王神社前の火元、三階建の高層建築料亭
花家は半焼けのまゝ既に火は衰え、一ツ木通
り方面へ類焼の帯は殆ど全焼、漸く縄張が
解かれた時、阿部フキ婆さんの二階家は骨組
だけを残してくすぶつており、私達下宿人二
人の財産はどうなつたものやら、フキ婆さん
の行衛も遂に判らずにしまいだつた。かくて私
は全くの無一物となつてしまつた。

火事場のさわめきも少し静まつた屋頂、荒
井京二も何処からか帰つて来た、そして夕刻
には荒井と高野の奔走で早くも有楽町一丁目
一番地、つまり有楽座前通りの向裡にある旅
館兼下宿屋の一室に荒井と同居することにな
つた。荒井は直ちに丸の内の憲兵隊長官舎の
姉の家から、亦高野は私の為に金巻通りの新
叶家から夜具や日用品を調達して呉れ、お蔭
で一刻の不自由も感じなかつた。この憲兵隊
系と花柳界系の二人、こんな時洵に頼りにな
る存在よと、つくづく感じ入つた次第だが、
その高野は序でだからと云い乍ら、小形の柳
行李を重そうにかついで来た「何とか金にな
りませんか」と数多くの紙包を取り出したが
それは茶呑茶碗や湯呑、或は小皿や小鉢類で

謹賀新年

<p>〒350 熊木秀司 埼玉原川越市南通町一ノ一 電話〇四九二(二二)四四六一番</p>	<p>〒198 岡部錦蝶 薩摩琵琶正絃会・四明会・さつき会 東京都青梅市大門七八七ノ一 電話〇四二八(二二)四四五八番</p>	<p>〒573 広瀬織水 錦心流琵琶教授 大阪府枚方市上島東町四番</p>	<p>〒420 伴野鶴風 静岡県吟詠同志会副会長 琵琶吟詠正吟会会長 静岡市沓谷三丁目一九三ノ二 電話〇五四二(六一)九四四四番</p>
<p>〒616 渡会恵介 伝統芸能懇話会 京都市右京区太秦御領田町一九 電話〇七五(八七一)四一六四番</p>	<p>〒625 高橋旭洋 日本旭会 舞鶴琵琶協会事務所 舞鶴市朝日通五条東入 電話〇七七三(六二)五二六二番</p>	<p>〒604 泉勝院峰口高昇 薩摩琵琶高昇流家元 京都市中京区高倉通丸太町下ル坂本町 電話〇七五(二一一)二〇八九番</p>	<p>〒168 竹下翠風 あさひ短歌会 翠琵琶宗家 東京都杉並区下高井戸五ノ二二 電話〇二一(三〇三)五八九四番</p>
<p>〒604 牧南水 錦心流琵琶 京都市中京区西ノ京西鹿垣町一 電話〇七五(八四一)二九八九番</p>	<p>〒120 松本諸水 錦心流一水会城東支部 支部長 東京都足立区青井三ノ七ノ一九 電話(八四〇)三八九二番 (八八九)三七〇八番</p>	<p>〒418 内藤欧水 錦心流琵琶 静岡県富士宮市小泉五〇一ノ三 電話富士宮〇五四四二(七)六二五七番</p>	<p>〒176 鈴木誉士 東京都練馬区豊玉北五ノ一一 芸友社 電話(九九一)〇三六三番</p>

謹賀新年

<p>〒618 秋元旭晨 大阪府三島郡島本町桜井四丁目 電話〇七五(九六一)五〇四三番 (晨城、光晨)</p>	<p>〒535 塩谷旭洲 筑前琵琶日本旭会 大阪中央部旭会会長 大阪府旭区中宮四ノ一二ノ一四 電話〇六(九五二)九二九四番</p>	<p>〒125 柏木篁道 日本琵琶楽協会会員 薩摩琵琶正絃会会員 東京都葛飾区鎌倉四ノ三九ノ四 電話〇三(六五八)一九四七番</p>	<p>〒658 神田中款水一 琵琶を楽しむ会 東大阪 神戸市東灘区御影中町一ノ一 電話〇七八(八五三)二六三番</p>
<p>〒011 星野耀水 錦心流一水会秋田支部 秋田市土崎港中央四丁目九ノ二 電話〇一八八(四六)三三四六番</p>	<p>〒183 坂本錦道 東京都府中市新町二ノ六八 電話〇四二三(六一)五六八四番</p>	<p>〒950 伊藤啓水 新潟市粟山三九九ノ一 電話〇二五二(七六)〇二〇八番</p>	<p>〒160 洲鳳会 大館派琵琶教室 詩吟天溪流宗家 東京都新宿区新宿一ノ一四一 電話(三五二)七三六六番</p>
<p>〒569 吉井良三 高槻市南総持寺町 電話〇七二六(九六)八五一六番</p>	<p>〒040 西村峽水 函館市柳町三ノ一五 電話〇一三八(五一)七九九七番</p>	<p>〒160 柏会 日本芸術琵琶 東京都新宿区西新宿七丁目一五 電話〇一三三(八五)七九九七番</p>	<p>〒181 伊集院鼓城 日本琵琶三位研修同志会本部 三鷹市上連雀二ノ九ノ一二 電話四二二(四四)一四一六番 (大村改め)</p>

年 新 賀 謹

〒173

東京都板橋区板橋一丁目二十一番四号
電話 (九六一) 一二〇〇番

池 上 作 三

〒520

大津市逢坂二丁目二ノ三二
(蟬丸神社前)
電話 大津(二四) 九三二八番

伊 松 藤 岡 旭 旭 暢 岡

日民同本部 京都市下京区四条通高倉
事務局 (大和銀行京都市角大丸前)
電話(三五) 二二〇〇番
世界救世教 熱海市桃山町瑞雲郷
本部 電話代(八二) 一五五七番
雲 濟 居 京都市東山区山科日ノ岡
電話(七五) 〇四〇四番

松 本 明 重

日本民主同志会中央執行委員長
宗教世界救世教外事対策委員長
法人 京都救世会館 名誉館長
社 団 日本郷友連盟本部理事
法 人 日本伝統芸術連盟理事長

年 新 賀 謹

〒154

東京都世田谷区太子堂二丁目二番八号
電話 (四一四) 六五七八番

宮 崎 直 二

〒569

高槻市津之江町二丁目二ノ三
電話〇七二六(七一) 六五八〇番

山 崎 旭 萃
山 崎 光 椽

筑前琵琶橋会宗範
大和流琵琶吟家元

日本琵琶振興会

会長 鈴木流泉

越谷市大成町一ノ二三九二
電話〇四八九(82) 二二四一番(代)

月例琵琶・吟詠研究会

会場 東京新宿一ノ四ノ九
洲 鳳 会 館
電話〇三(三五二) 七三六六番
毎月 第四日曜日一時~八時

十周年記念

特別研究発表会

第一回 四月十一日 五時~九時
第二回 六月十六日
第三回 十月十八日
会場 東京上野広小路
本 牧 亭

新年 賀 謹		
<p>千184 東京都小金井市本町一丁目 電話〇四二三(八)三三四番 八ノ五</p> <p>伊藤馨水</p> <p>錦心流一水会多摩支部長 各流派琵琶武絃会事務所</p>	<p>千370-12 群馬県高崎市岩鼻町二四七 電話〇二七三(四六)二〇〇六番 (局前)</p> <p>宗家 針谷 錦古</p> <p>全国朗吟文化協会関東副部長 テイテクレコード専属 群馬琵琶連盟会長 日本錦古流総本部会長</p>	
<p>千790 閑居庵 松山市立花町三丁目五ノ六 電話(四一)三八八七番</p> <p>佐藤晃絃</p> <p>愛媛琵琶連盟顧問 薩摩琵琶松山晃絃会</p>	<p>千600 京都市下京区西新屋敷下之町 電話(三四一)一六七四番 二二</p> <p>水也田流教頭 琵琶楽 琵琶講談</p> <p>緑鶯斉美登里進水</p>	
<p>千359 所沢市日吉町十七ノ十三 電話〇四二九(二)三一七五番</p> <p>平井洲誠</p> <p>錦心流大館派琵琶</p>	<p>千124 教室 東京都葛飾区堀切二ノ六〇ノ三 清和荘二階一五号 電話〇三(六九四)九五七九番</p> <p>史城 普門 義則</p> <p>社団法人東洋音楽学会々員 邦楽鶴鳴会 主宰</p>	

新年 賀 謹		
<p>千662 西宮市羽衣町七ノ三四 三浦蓮水方 電話〇七九八(三三)五八八七番</p> <p>一水会神戸支部 会員一同</p> <p>錦心流琵琶</p>	<p>千570 守口市緑町土居団地十一号 小川吟水方 電話大阪(九九二)五六二五番</p> <p>一水会大阪支部 会員一同</p> <p>錦心流琵琶</p>	
<p>千650 芦屋市三条町二四八 電話〇七九七(二)四三三八番</p> <p>市来 芦村</p> <p>薩調物語琵琶</p>	<p>千164 東京都中野区中野二ノ二五ノ六 電話(三八一)八九二二番</p> <p>宗家 浅野晴風</p>	
<p>千250-04 神奈川県足柄下郡箱根町強羅 電話〇四六〇(二)二二二番 一三〇〇 紅葉閣</p> <p>押川旭葉</p> <p>筑前琵琶橋会</p>	<p>千164 東京都中野区中央一ノ三二ノ六 電話(三六一)七七四〇番</p> <p>仲川秀邦</p> <p>薩摩琵琶</p>	

謹 賀 新 年

〒544

大阪生野区小路二丁目
電話〇六(七七五三)〇〇六三六二七五番

高千穂 旭 楓

〒537

大阪東成区神路三ノ八ノ十八
電話〇六(九八二二)九九一四
夜間〇六(九七二二)二七七八番

榊 本 旭 風

筑前琵琶日本旭会
東大阪旭会
会長

〒114

東京都北区田端町一五三番
電話(八二二)六六六二番
振替 東京二〇〇四一番

鈴木 木 鉦次郎

理事長

日本芸能顕彰会

〒603

京都市北区平野宮西町六四
電話 平井方 (四六二)一四二三番

京都琵琶協会

伊戸倉 吹田 宮田 倉吹 伊栗 天
正陽 春嶺 平井 春嶺 伊栗 天
香川 長谷 藤崎 南博 錦嶺 舟嶺 陽芳
高之口 兼光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
枚方 原口 天南 博錦 錦嶺 舟嶺 陽芳
豐中 杉本 木之 内口 兼光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
川西 杉本 木之 内口 兼光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
芦屋 來田 良治 岳盛 光孫 光城 章蝶 風嶺 陽芳
名古屋 小島 津野 鶴 叢 芦村 三作 盛光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
浜松 島津 鶴 叢 芦村 三作 盛光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
久留米 鳥津 鶴 叢 芦村 三作 盛光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
名譽會員 大京阪 伊勢谷 秀安 夫江波

謹 賀 新 年

〒651

神戸市葺合区上筒井五ノ四ノ二
電話〇七八(二二二)一一六一番

上原 まり (旭艶)

宝塚花組

柴田 旭堂

筑前琵琶旭会・旭堂会

〒060-91

札幌市中央区南六条西七丁目
電話〇一一(五一)八三四八番

広川 岳 楓

会 員

正派 薩摩琵琶四明会
事務所 京都市北区平野宮西町六四
電話 〇七五(四六二)一四二三番

京 都 伊栗 天
香川 長谷 藤崎 南博 錦嶺 舟嶺 陽芳
高之口 兼光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
枚方 原口 天南 博錦 錦嶺 舟嶺 陽芳
豐中 杉本 木之 内口 兼光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
川西 杉本 木之 内口 兼光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
芦屋 來田 良治 岳盛 光孫 光城 章蝶 風嶺 陽芳
名古屋 小島 津野 鶴 叢 芦村 三作 盛光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
浜松 島津 鶴 叢 芦村 三作 盛光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
久留米 鳥津 鶴 叢 芦村 三作 盛光 孫光 城章 蝶風 嶺陽
名譽會員 大京阪 伊勢谷 秀安 夫江波

年 新 賀 謹	
<p>〒171 東京都豊島区高松三ノ一二 電話〇三(九五五)三六四五番</p> <p>筑前琵琶 藤 卷 旭 鴻</p>	<p>〒177 東京都練馬区石神井台四ノ五 都営住宅一〇一五〇二 電話〇三(九二八)四〇一三番</p> <p>物語琵琶 杉 山 旗 水 雅 俊</p>
<p>〒040 函館市青柳町二六ノ一四 電話 (二二) 八三六五番</p> <p>函館吟詠連盟 函館琵琶協会 高 橋 蘇 水</p>	<p>〒651 神戸市葺合区八幡通四丁目 二ノ一七 電話〇七八(二二)一六一〇番</p> <p>久 徳 旭 蘭</p>
<p>〒369-12 埼玉県大里郡寄居町玉淀 電話〇四八五(八一)一七四〇番</p> <p>筑前琵琶 大 井 錦 淀</p>	<p>〒602 京都市上京区榎木町堀川角 電話〇七五(二二)四〇三三番</p> <p>筑前琵琶 中 島 旭 穂</p>

年 新 賀 謹	
<p>〒570 守口市緑町土居団地一一号 電話 (九九二) 五六二五番</p> <p>錦心流琵琶吟水会 小 小 金 桜 川 西 寄 田 吟 甫 靖 育 水 水 水 子</p>	<p>〒662 西宮市羽衣町七ノ三四 電話〇七九八(三三)五八八七番</p> <p>錦心流琵琶 教室・蓮水会 哲泉流詩吟 三 浦 蓮 水 会員一同</p>
<p>〒431-31 浜松市積志町一八三一 電話〇五三四(三四)〇八七一番</p> <p>薩摩琵琶鶴彦会 小 野 鶴 彦 (晃陽)</p>	<p>〒617 向日市西向日鶏冠井町 山端二番地 電話 (九三一) 一六九一番</p> <p>梅 原 旭 濤</p>
<p>〒959-15 新潟県南蒲原郡田上町川船河 電話</p> <p>野 崎 暁 水</p>	<p>〒601 京都市南区吉祥院中島町 電話 (六九二) 〇三〇ノ八番 三美会琵琶修理部 どんな琵琶でも修理いたします</p> <p>琵琶三美会 会長 矢 吹 旭 美 津 田 中 鵬 水 富 山 旭 貴 西 村 旭 富 一 坊 寺 旭 清 外 門 人 一 同</p>

あれも瀬戸物ならぬ風雅な「楽焼」ばかり、しかも全部「不味」のサイン入である。この「不味」なるサインの主こそは、当時政変ある毎に畏れ多くも明治天皇の補佐役として總理大官選定の重任を承る元老西園寺公望公であり、その楽焼の窯は春毎に桜の花見で賑う向島堤の叶家別宅庭内に設けられたものと聞く。

別宅と云えば、京橋の木挽町にも新叶家の別宅があり、新叶家の息子高野保長に誘われ度々通ったものだった。或日保長と銀ブラの戻りにその別宅で食事をする事となり、副食に牛肉の味噌漬を選んだ、高野保長は女中と共に食膳の用意に当り、私はその牛肉の味噌漬を買って引受けた、この別宅の門を出て左に行けば、約一丁程で歌舞伎座通りの食料品店に突当る、そこに呼物の牛肉の味噌漬があるのだった。

さて此の別宅は、玄関を入れば四畳の間でその左に床の間付八畳の座敷があり、洒落た板塀内の小じんまりした庭園に面する廊下で、保長は七輪に牛肉の味噌漬二、三切を乗せ、シユウシユウと薄青い煙をたて、おる処え、女中が膳部を運んで来たその途端、無断で玄関から四畳の間へあがる人の気配がした、女中は突嗟に「御前(ごぜん)がお見えてす」とお膳を投げ出すようにして、襖をあけるより早く老紳士が現われ、「ウ、ム、よい香いがするな、いじやないか、そのまゝそのまゝ」と連発の言葉だが、保長は恐縮しながら味噌漬

漬を乗せたまゝの七輪を抱えるようにして勝手へ去った、私も少々あわて気味で玄関の間に出ると、保長は味噌漬の一切れをほゞばり乍ら現われ、共に銀座通りの松喜屋で焼き焼の客となったが、その時初めて彼の老紳士は当時政界に知られた頭官後藤新平であることを知った。それは大正六年頃で、今の東京駅の前身が完成して二、三年後に当るが、時の鉄道院総裁として駅前広場を見守って立つ銅像も此人だったろう。

その頃、大民の主人山岸為吉氏は、朝鮮の東林鉦山視察旅行から帰って来た、私への土産として翡翠の美事を瓢箪の丸彫だった。山岸氏は、ダイヤモンドに次ぐ硬質といわれる翡翠がどのようにして彫刻されるものか、その産地に赴き親しく見聞した次第を得意気に語るのだった。

新年 謹賀

吟詠 赤心流

家元

赤心流 鶴翁

〒420 静岡市西草深町二十一番二十号 電話〇五四二(五三)一四七一

徳川幕府から 明治維新まで

辻 旭城



慶応四年(一八六八)一月三日、政府は鳥羽・伏見の戦いで幕府を破って、ここに維新の大局をきめた。敗北した幕府は大阪に逃げたが、徳川慶喜は八日に榎本武揚艦長の開陽丸に乗って江戸に向った。

これがため大阪は無防備状態になった。数度の戦いにきどおった暴民達は街中の掠奪をほしめ、一部は藻抜けの殻となった大阪城内に押かけ、倉庫を破って食糧、武器、衣服、建具など日用品の数々を奪った。このとき町奉行所の貴重な帳簿類も数多く紛失し、九日には城に火災が起って二日間燃え続け、修繕して間もない櫓や殿官などが焼失してしまった。

この火災については、敗れた幕府が大阪城へ逃げ込み、これを追った長州軍が城明渡しを要求して城外で待機していたとき、たまたま城中から火を発したという失火説と、長州軍が砲撃を加えたからという説もある。

一月十日征夷大將軍仁和寺宮喜親親王が大坂へ乗込んで来た。「宮さん宮さんお馬の前にはひらひらするのは何じゃいな、あれは朝敵征伐せよとの錦の御旗じゃ、知らないか、トコトヤレ、トコトヤレな」。

仁和寺の宮が、紅蓮の錦生地の日と月を描いた二流れの錦旗を先頭に、別に天皇の旗を奉持して来た時の歌で、以来庶民達によって全国に流行した。

仁和寺宮が随員を従えて大阪に到着し、町民慰撫の令を下したため混乱は少し鎮つた。十二日に臨時の軍政機関大阪鎮台が本願寺津村別院(現在大阪市東区本町四丁目)に設置され、又大和、兵庫にも置かれた。江戸はすつとおくられて五月に設置された。

鎮台の業務は行政、司法、軍事の総てを兼ねた。まづ撰・河・泉三国の政務を統理することから始められた。これは大阪府庁の前身と見てよいだろう。二十七日大阪裁判所と改称し、西町奉行所があった東区内本町橋詰一本町橋角に移転した。

今の裁判所とちがいは、当時は行政一切を司どるのが仕事であった。記録によると総督は公卿の醍醐忠順、副総督に伊予守和島前藩主伊達宗城が任ぜられたと書かれている。

大阪城の南東区越中町附近は、昔細川越中守の大阪玉造屋敷の跡で、方円坂団地アパートの東に越中井戸が残されている。

江戸時代の貨幣は金・銀・銭(銅)の三種であった。品物の値段をあらわすモノサシが、関東では金貨の量目、兩・分、朱に對し、上方では貫、匁、分で、銭は関東も関西も小銭の勘定をするのに用いた。上方が銀目を用いるのは、室町時代から銀山の開発が進んだ上南蛮貿易に銀を使うなど早くから銀に親しんでいたからだという説がある。

偶感



〇〇〇水

(前略) 京紋もよく続けられています。

普門さんの琵琶楽器についての基本楽理の記事は、私達としては良い参考となるものです。短い時間ながら語り合ってお人柄に感じました。斯ういう内容などは今の若い人には薬になります。

西郷天風さんの自伝も悪くはないですね、ご高令で在りながらよく記憶を辿られていますので、琵琶界華やかなりし頃が偲ばれます。

たゞ、物足りないのは琵琶界浮沈の現在にもう少し活を入れる内容の記事が加えられたら一層よくなると思います。これは〇〇紙でも〇〇誌でもそう云えると思います。温存で事なかれ主義では向上や発展への刺激にはなりません。褒めるのもよいが叱るのもその人の向上につながるというものです。編集者としても、と元氣を出して下さい。(原文のまま) 本稿は事前に執筆者に掲載の諒解を取る事が出来ませんでしたので失礼ながら匿名としました。不悪。 一係

言 (27)

足利義政 足利八代將軍。京都に於ては良きにつけ悪きにつけ切離せぬ人物。延徳二年五十六才で没。応仁の乱の原因をつくり京都を灰と化し徳政令を十数回も出して下剋上の社界を現出した。有名な東山文化の時代を生んだ傑物で、一方では美術を愛好してその保護に尽力し、將軍というよりは銀閣寺を残した事の方が強いイメージで残っている。四畳半茶室の始祖で詩歌にも絵にもすぐれた。法名に「慈照院」とありこの院号が銀閣寺の本名である。

薩摩筑前合同 十月二十七日(日) 昼松
秋季演奏大会 山市民会館ホール、主催愛媛琵琶連盟。静一旭優、旭秀、旭悠鳥、旭好旭苑、旭翠、兎と龜、森本旭華、詩吟一松本旭翠、井伊大老一和田旭秀、鴨川の露一齊藤旭苑、華道花の恵一原田旭悠鳥、立方舛沢旭悠綾、大徳寺一井手旭明、田村邸一湯藤旭窓川中島一高知西森旭生、白虎隊一遠藤旭佳親鸞一村上旭隆、薩摩健児一浅田芦水、劍舞尺八入、大楠公一舛久旭好、竜の口一栗田絲水、西郷隆盛一白石旭優、城山一佐藤晃絃、堅田落一石塚旭美、敦盛(下)一宇和島佐々木耶

水 青葉の笛一吉田京関旭制、衣川一横浜梶ヶ谷苑水、横笛一岡塚原伸水
錦心流琵琶と 十月二十七日(日) 西宮
詩吟詩舞の会 市夙川公民館に於ける三浦蓮水女史主催の首記中演奏者と曲目は前号報道の通りであるが当日は午前中雨模様であったにも拘らず立錫の余地無き超満員で大成功をおさめた。特に青柳流詩舞「寿」「小田原懐古」や「小楠公の母」(歌と吟蓮水女史)、原義人氏の剣舞(吟桜泉)、「大楠公」など琵琶詩吟の「静」から立体的的「動」を組入れた演出効果は聴衆を完全に魅了せしめた。
榎本芝水氏 第四四六回の演奏会を十一月十四日(木) 昼東京日本橋
東京証券ホールで開催。母の教一芦川、七卿落一芦川、城山一井上、広瀬中佐一吉田山水、細川ガラシャ一寺内峰水、常陸丸一木村東水、紅葉狩一畑嘉水、山科の別れ一西吟水、詩吟一阿部奨水、別れの国歌一柿木昌水、桐一葉一長野奏水、川中島一野池信水、会津白虎隊一小嶺沢水、扇の的一安藤敬水、竜の口一太白詩水、北満の志士一吉田梗水、俊寛(下)一筒井秀水、西郷隆盛一加藤斐水、木村重成一北沢来水、石重丸一会主榎本芝水、外に剣舞一。

京都琵琶協会 恒例の協会各流派合同の秋季演奏大会 首記が秋晴の十一月十七日(日) 昼零時半から京都東山安井金比羅宮会館で開催された。終日の降雨で聴客の集りをひそかに案じていたが土地柄で同好の男女は秋雨を侵して続々と詰めかけ終始満員の盛況を呈した。当日は会員の外東京、新潟、大阪のゲスト出演で錦上花を飾った外折から入浴中の埼玉県の大井錦淀氏も臨時出演されて一段と光彩を放ったが予定の戸倉旭嶺、木村維水兩氏の病欠欠演は残念であった。
(抽籤出演順) 竜の口一牧南水、高松城一田中鶴水、川中島一阪本一峰、禪師と正宗一安住旭康、乃木將軍一古谷寛水、寂光院一植村真水、坂崎出羽守一大阪高千穂旭楓、西郷隆盛一新潟野崎晴水、鉢の木一埼玉大井錦淀、栗津ヶ原一矢吹旭美津、小野訓導一新潟五十嵐雅水、大物の浦一戸田旭公、本能寺一東京前田秋声、大高源吾一梅原旭濤、光秀の最期(下)一平井春嶺、衣川一若宮旭登、六時終演、主客一堂に会して乾盃の後和やかに散会した。
日本琵琶芸術協会 十一月十七日(日) 十一月 例会 昼東京西新宿ピル六階。第五弾法連弾。お江戸日本橋一山崎錦幽本能寺一関口修声、佐野の夜話一石田脩水、衣川一青木晴城、異国の丘一錦幽、宮本武蔵一杉山旗水、竜の口一長谷川錦舟、勸進帳一脩水。当日は前田洲月師を来賓に迎え柏会今後の運営などにつきアドバイスを受けた、七時閉会。尚十二月は秦野市で義士祭を開催の予定。

旭城会

十一月十七日(日) 昼彦根
秋季演奏会 市勤労福祉会館四階ホール、市文化祭協賛。吉野落一近藤旭詠、小泉旭蘭、絃旭鴨、湖水渡一田部旭彰、絃旭城、曲垣平九郎一川川旭誠、射手矢旭将、絃旭城、加藤清正一佐治旭竜、稲垣旭流、絃旭秀、関ヶ原一三浦旭彦、三浦旭爽、絃旭鵬、竜の口一川旭桜、絃旭城、栗津ヶ原一岩崎旭心、小栗栖一加藤旭絃、矢野旭峯、絃旭城、衣川一樋口旭秀、北の庄一堀川旭騰、禪師と正宗一會長林田旭城、(以下来賓) 舟弁慶一谷本旭観、井伊大老一稲本旭蘭、大徳寺一志水旭城、隅田川一鈴木旭芳、由比ヶ浜風一山本旭城、大楠公一松本旭柳、外に詩吟三題。

武絃会。一水会多摩 十一月十七日(日) 支部合同研修会 昼小金井市福祉会館。城山一篠宮援水、父。乃木將軍一伊藤警水、西郷隆盛一富田晴萌、俊寛一工藤環秀、吹雪の敵一高杉洲靖、捨児一中島瀑水、白虎隊一清水源城、石重丸一石井效水、奥の細道一伊集院鼓城、紅葉狩一菊地甘水。六時閉会。
三位研修同志会 十一月二十四日(日) 第十八回例会 昼三鷹市上連雀公会堂。伊集院鼓城氏の司会で十月十六日逝去の呉究静軒氏の冥福を一同で祈ったあと門琵琶。お江戸日本橋一山崎錦幽、異国の丘一岡田白虎隊一伊藤友彦、奥の細道一伊集院鼓城、父。乃木將軍一伊藤警水、台湾(下)一田戸桜丸、城山一西村高峻、竜の口一中村修水、白虎隊一清水源城を順奏、外に来賓坂井眺水、村木桜柳両女史列席。尚十二、一、二月は休会し三月から例会再開に決定した。

荒城月夜曲一天津扇三、遊吉野一竹本光将、川中島一大迫光山、静一木村光勝、矢吹光風、源義経一久徳光蘭、桜井の駅一三木光照、湊川一寺尾松風、新相馬一秋元辰城、小田原懐古一板谷光邑、安宅の関一會長山崎光謙、外に吟剣詩舞五十四題。
琵琶吟詠 十一月二十四日(日) 午前十時
吟舞大会 時浜松市助信町公民館、主催薩摩琵琶鶴彦会(會長小野鶴彦氏)。吉野山懐古一村松聖風、赤壁一佐野晃雲、木枯一石川晃豊、吉野落(上)一太石晃月、寂光院一三上晃城、竜の口一松永初心、城山一小村鋒舟、旅順開城(上)一大阪山之内兼光、石重丸一小野ひろみ、しげよ、花紅葉一伊藤晃嶺、白虎隊一柿沢富峰、瀧陽江一東京八東一峰、北の庄一同吉田旭明、彰義隊一同仲川秀邦、楠正成一吟意麗豊、足柄山一染谷晃岳、小督一静岡岡尾鶴城、元寇一京都平井春嶺、桶狭間(一)一小野鶴彦、門琵琶一合奏、吟詠教盛塚一赤心流鶴翁、外に吟詠剣舞等二十一題。

錦心流琵琶 十一月十七日(日) 昼大阪支部。創立二十周年を記念し各地の名手を招いて開催。金剛石一一同、吉野山懐古一菊地庸子、静一中山嬢水、白虎隊一金寄晴水、別れの盆一小西甫水、井伊大老一養老駿水、屋島の巻一宮ノ原聖水、戦艦大和一松岡玲水、川中島一佐々木寒水、竜の口(下)一植田豊水、あゝ川中島一飯塚緑水、吉野落(下)一中西鏡水、戸隠山の紅葉狩一木村蓮水、西郷隆盛一中山鳳水、巴の前一藤原英水、鉢の木一會長小川吟水、絃東意水、詩吟本能寺一桃木耳水、(以下来賓) 常陸丸一京都馬場鴨水、本能寺一神戸三浦蓮水、巡礼お鶴一東京荻野甲水、山科の別れ一岡谷暉水。

詩吟と 十一月二十四日(日) 朝十時
琵琶吟の会 半高槻市富田農協会館、主催大和流琵琶吟光椽会。高槻市吟剣詩舞連盟協賛で同市に於ける第一回公開演奏会。小春日和の好天で満員の盛況を呈した。阪本竜馬一駒井、敦盛塚一細川、菅公一永井、敦盛塚一谷川、弘法大師一野田光敏、赤垣源蔵一坊寺光晴、曾我兄弟一島田信二郎、島田良仁、菅廟の月一合吟、合奏千代の寿一久徳、三木、木村、矢吹、板谷、安宅一島田光千、琵琶舞

柴田旭堂女史と 楽譜もなければ事洋楽等との合同演奏 前の打合せも殆どせず只四人の邦、洋楽家がそれぞれのイメージで音楽を奏する。テレビ、ラヂオなどでお馴染みのコンガ奏者古谷哲也氏が音楽は即興的のものであるとして十一月二十五日(月) 神戸国際会館の大会場に於て琵琶の柴田旭堂女史と古谷氏が「邪馬台国」の魏志倭人伝に